

当院で経験した ACV 耐性 HSV による新生児単純ヘルペス脳炎の 1 症例

◎加藤 遼¹⁾、伊藤 亜子¹⁾、磐佐 大樹¹⁾、林 智剛¹⁾、中山 純里¹⁾、関根 綾子¹⁾、菊地 良介¹⁾
岐阜大学医学部附属病院¹⁾

【はじめに】新生児における単純ヘルペスウイルス (Herpes Simplex Virus : HSV) 感染症は主に母体からの産道感染によるものである。今回、新生児単純ヘルペス脳炎 (Herpes Simplex Encephalitis : HSE) の 1 例を経験したので報告する。

【症例】日齢 X 日、男児

【主訴】発熱、咳嗽、鼻汁

【現病歴】咳嗽、鼻汁が出現し前医救急外来を受診した。静脈血液ガスで CO₂ 貯留、アシドーシスを認めたため、当院小児科紹介受診となった。当院受診時には発熱を認め、静脈血液ガスは pCO₂:69.1 mmHg と高値であった。鼻咽頭ぬぐい液より RS ウイルスが検出され RS 気管支炎と診断され、加療目的にて入院となった。

【経過】第 6 病日、呼吸状態悪化のため ICU 管理となった。第 9 病日には活気不良や体動低下を認めたため、脳波検査が実施された。脳波検査では低振幅な背景脳波に高振幅徐波及び律動波を認めた。頭部 CT 検査、頭部 MRI 検査では脳炎/脳症と考えられる所見であった。第 14 病日に行われ

た髄液検査では細胞数 31 個/μL、TP 136 mg/dL、Glu 29 mg/dL であった。髄液 PCR 検査にて HSV-2 を検出し HSE と診断され、抗ウイルス剤 (ACICLOVIR : ACV) による治療が開始された。第 18 病日、再度行った脳波検査ではさらに低振幅となった。頭部 MRI 検査では脳萎縮の進行を認めた。第 52 病日に ACV 耐性 HSV であると判明し、在宅での治療方針となり退院した。

【まとめ】HSE の本邦における発症率は 3.5/100 万人である。HSE の主症状は、発熱・哺乳不良・活気の低下・けいれんなどである。これらの症状が生後平均 11 日に現れるが、非特異的症状で発症することが多く臨床症状・経過のみによる診断は困難とされる。小児期のヘルペス脳炎は発熱、けいれんとともに急速に意識障害が進行し、無治療では極めて予後不良であり、生存例でも高率に神経学的後遺症を残すため、検査による早期診断・早期治療が望まれる。

連絡先：岐阜大学医学部附属病院 (058-230-7261)